

■ 特集1 書評特集 先端社会研究所叢書『戦争が生み出す社会』 ■

書評シンポジウム「戦争が生み出す社会」

ー 関学先端社会研究所叢書『戦争が生み出す社会』を手がかりにー

蘭 信 三

(上智大学)

2013年、14年に関西学院大学先端社会研究所叢書『戦争が生み出す社会』（全Ⅲ巻）が刊行された。第Ⅰ巻は荻野昌弘編『戦後社会の変動と記憶』（新曜社、2013年2月）、第Ⅱ巻は島村恭則編『引揚者の戦後』（新曜社、2013年8月）、第Ⅲ巻は難波功士編『米軍基地文化』（新曜社、2014年3月）で、総計で27の章と4つのコラムからなる全1000頁にもおよぶ本格的叢書である。

本叢書は、「戦争が生み出す社会」とはいかなるものであったのかという共通テーマを「空間」「移動」「他者」というキーワードをもとに、第Ⅰ巻は敗戦によって打ちのめされた日本社会の戦後の変動を人口変動、空間の再編、戦争の記憶から迫り、第Ⅱ巻は従来取り上げられることの少なかった引揚者の戦後を様々な視点から描き出し、第Ⅲ巻は敗戦後の占領によって形成された米軍基地とそれを取りまく文化を多様な視点から考察している。第Ⅱ巻は先行研究が少なくそれ自体が貴重であるが、第Ⅰ巻、第Ⅲ巻はオーソドックスなテーマでありながらも本叢書のなかで新たに捉え直されたことでその意味がより豊かなものとなっている。このように本叢書は、「戦争が生み出す社会」を真正面から主題とする、日本社会学における数少ない戦争研究叢書となっている。戦争社会学研究はもちろんのこと、日本社会学にとっても貴重な研究成果となっている。

第Ⅰ巻を手にした時に私は本叢書を合評会というかたちで取り上げることを決めた。そこで、かねてから学会の理事会やその後の共同研究で協力関係にあった荻野昌弘氏（本叢書を企画段階からリードしてきた中心人物だが）と相談し、戦争社会学研究会の運営委員として、関西学院大学先端社会研究所と戦争社会学研究会の共催で書評シンポジウムを開催することを提案した。幸いにも双方の機関の承認を得て正式化し、2014年9月15日に関西学院大学梅田キャンパスで本叢書の書評シンポジウム開催の運びとなった。

シンポジウムは、各巻を2人の評者がコメントして編者がそれにリプライし、最後に総合討論を行うというスケジュールで、たっぷり4時間を準備するという贅沢なプログラムのもと、9名の登壇者を中心にシンポジウムは進行されていった。当日は夏休みの最中であったが、国内外から50名余の参加者をえて、フロアーからの質問もポイントを押さえたものが多く、懇親会にも半数が残って議論の余韻にひたるという充実したものとなった。

本特集は、そのシンポジウムをまとめたものである。ここでは特集の序として、本シンポジウムの意義・意味を戦争社会学に関する研究史の視点から紹介していきたい。

そもそも戦後日本社会論の基本テーマは戦争であった。日本にとって第二次世界大戦での無条件

降伏という敗戦は近代以降もっとも大きな出来事であり、それは近代日本のターニングポイントだったからだ。文字通り、空襲、沖縄での地上戦、原爆投下、敗戦、そして連合軍による占領、敗戦後の外地からの引揚げ等々は、物理的にも社会的にも様々に日本社会にインパクトを与えた。その焼け跡のなか、戦前の軍国主義の原因、転向、封建遺制や民主化課題等をめぐり、丸山真男、藤田省三、鶴見俊輔等々をはじめ多くの先達が戦争と日本社会に関する研究を切り拓いてきた。

しかし社会学においては、戦争を「真正面からテーマとする研究」は少なかった。少ないと言っても、高橋三郎の「戦争研究と軍隊研究－ミリタリー・ソシオロジーの展望と課題」(『思想』605号、1974年)と『強制収容所における「生」』(二月社、1974年)を嚆矢に、高橋らの『共同研究 戦友会』(田畑書店、1983年)、高橋の『「戦記もの」を読む－戦争体験と戦後日本社会論』(世界思想社、1988年)、森岡清美の『決死の世代と遺書－太平洋戦争末期の若者の生と死』(新地書房、1991年)と『若き特攻隊員と太平洋戦争－その手記と群像』(吉川弘文館、1995年)、河野仁の『「玉砕」の軍隊、〈生還〉の軍隊』(講談社、2001年)が続き、そして中久郎らの『戦後日本のなかの戦争』(世界思想社、2004年)等々が刊行されていた。だが、その一連の研究成果から戦争社会学が一つのジャンルとして目される、あるいは目指されるまでには至らなかったが。

2009年5月、青木秀男の呼びかけで戦争社会学研究会が結成されたことが大きな転機となった。広島で都市下層研究と共に戦争研究を刻み続けてきた青木のリーダーシップ、特攻隊研究でさらなる高みに達した日本社会学会の泰斗・森岡清美のサポート、そして若手の活躍で研究会は5年間の活動実績を積みあげてきた。それに結成の数年前に若手メンバーの中核の福間良明の『「反戦」のメディア史－戦後日本における世論と輿論の拮抗』(世界思想社、2006年)と野上元の『戦争体験の社会学』(弘文堂、2006年)が刊行されていた。まさに戦争社会学の機は熟していたのである。

戦争社会学研究会の活動を通じて野上と福間は、40余名とともに『戦争社会学ガイドブック』(創元社、2012年3月)を編集し、ついで翌2013年7月には福間・野上・蘭・石原らの『戦争社会学の構想』(勉誠出版、2013年7月)という本格的な戦争社会学の本を刊行した。そして、これらに加えて関西学院大学先端社会研究所叢書『戦争が生み出す社会』が刊行されたのである。それに先だつ2012年には荻野によって日本社会学会大会で「戦争を社会学する」というテーマセッションが設けられ、盛会だったという。

まさに、高橋三郎が切り拓いてきた「戦争社会学」という研究領域が一つの潮流となりつつある、と言えよう。その意味で、本シンポジウムは、かつて高橋三郎が森岡清美『決死の世代と遺書－太平洋戦争末期の若者の生と死』(1991年)刊行を受けて日本社会学会大会で書評セッションを企画したことを引き継ぎ、関学先端研叢書の意義と意味を日本社会学や隣接領域に問いかけていくことをねらったものでもある。具体的内容については1章以下にゆずるが、本シンポジウムの試みが隣接領域も含めた戦争社会学のよりいっそうの展開に貢献することを願ってやまない。

最後に、本シンポジウムの共催を快諾し、それを特集号としていただいた関西学院大学先端社会研究所に心から感謝申し上げたい。

(2014年12月1日)